

目 次

1. 各専攻・講座の教育・活動報告

看護学専攻	1
医療技術学専攻医用量子科学講座・放射線技術科学専攻	4
医療技術学専攻病態解析学講座・検査技術科学専攻	8
リハビリテーション療法学専攻・理学療法学講座	11
リハビリテーション療法学専攻・作業療法学専攻	13

2. 公開講座

17

看護学専攻（平成 24 年度）

平成 9 年 10 月 1 日付けの改組で設置された医学部保健学科であるが、平成 24 年度 4 月 1 日より大学院講座化の運びとなり、名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻へと体制が大きく変化したことが、まず特記される。これまでの保健学科体制下においては、学部教育は 4 講座（基礎看護学、臨床看護学、発達看護学、地域在宅看護学）、兼任する大学院教育の博士課程前期課程では 3 分野（基礎看護学、臨床看護学、発達看護学）、博士課程後期課程においては 2 分野（健康障害看護学、健康発達看護学）と非常に複雑な組織であった。新たな体制では、博士課程前期課程・後期課程ともに 2 分野（基礎・臨床看護学、健康発達看護学）となり、学生にとってたいへん解りやすい形で整理されたものと思われる。

近年、医学とその周辺領域学問の進歩、ならびに医療の高度化は著しく、一方で生活の質の向上を目指した患者家族看護(ケア)の高まり、さらに長寿社会での健康増進、地域ケアの進展など、保健医療現場の変貌は著しい。多様化する保健医療の要請に応えるため、看護学の本質の探究、社会に求められる看護の役割、看護技術やケアシステムの開発、看護実践の科学的追究など、科学的根拠のある看護学の確立にむけた教育研究の推進が求められている。看護学専攻では、現在の高度化する医療に対応し、高い倫理観を有して包括的な患者および家族中心の看護を展開できる指導的看護専門職の育成を目指すとともに、多様化する保健医療の要請に応える新しい看護学の創造に取り組む研究・教育者の育成を図ることを教育の目的としている。

平成 18 年度に博士後期課程の完成年度を迎えてから 7 年を経過し、教育実績では学位取得者数は累積で 22 名（満期退学者後の学位取得者を含む）となった。年度単位の学位取得者数は平成 23 年度 6 名と徐々に伸びつつあったが、24 年度は 5 名（満期退学者後の学位授与者を含む）であった。大学院設置から看護系和雑誌トップジャーナルへの論文掲載を目標としてきたが、その後の経過でほぼ英論文のアクセプトが学位申請の条件となったこともあり、現実として 3 年での学位取得の困難さがある。他方、前期課程の教育においては、平成 24 年 3 月には専門看護師教育課程として「小児看護分野専門看護師養成コース」が新たに認定された。したがって、平成 24 年度からはがん CNS コース、小児看護 CNS コースの 2 つの専門看護師養成コースを公式に標榜できるに至った。

学部教育における看護学専攻の教育目標は、人間の尊厳を基盤においた全人的看護を実践する看護の専門職者を育成するために、人々の健康に貢献すること、将来の教育者・研究者として基本的な資質を育成し、将来的に看護学の発展に寄与する人材の育成することにある。具体的には、看護専門職を総合的に理解し、幅広い教養と知識を身につけ、科学的な看護実践を推進できる看護師・保健師・助産師を養成し、かつ、将来の研究者・教育者としての基盤を育成することにある。なお、平成 24 年度入学生からは新カリキュラムへ移行した。これに伴い、卒業時点において看護師国家試験の受験資格のみが全員に与えられるが、保健師国家試験受験資格については助産師と同様に入学後 3 年次の選抜試験を経て、一部の学生に限られることとなった。

さらに、特記すべきこととして、平成 24 年度（第 5 回）国立大学保健医療学系代表者協議会看護学分科会総会（看護分科会代表：浅野みどり主任）を幹事校として開催した。全国 42 校から国立看護系大学の代表者総勢 60 名が一堂に会し、国立大学における看護学教育に特化した課題について有意義な意見交換を行った。総会に先立ち、文部省医学教育課看護専門官石橋みゆき氏より教育講演「大学における看護学教育の動向」をいただいた。

1. 運営

1) 教員の構成

2 講座（基礎・臨床看護学、健康発達看護学）で再構成し、大学院教育を運営している。また、兼務の学部教育については、基本的には 4 領域体制を保持して基礎看護学 8 名、臨床看護学 9 名、発達看護学 8 名、地域・在宅看護学講座 8 名の 33 名の教員構成である。加えて、名大附属病院看護部との合同プロジェクト「Saving life ナース育成プラン（文部科学省 大学改革推進事業 看護師の人材養成システムの確立）」特任教授および特任講師（東海がんプロジェクト）の 2 名とともに、教育内容や教育方法の向上及び研究の活性化を責務として専攻の運営にあたっている。

2) 運営の執行状況

教育・研究の円滑な推進のために、専攻主任（浅野）、専攻副主任（池松）を中心に、看護学専攻教授会（2 回）・看護学専攻大学院委員会（1 回）・看護学専攻会議（全教員）を定例で毎月開催し、必要に際しては臨時開催を実施している。教育に関連する諸課題や学生指導に関する諸問題、予算措置などについて検討し、未だ看護系大学ならびに大学院が増設されるなか、先見をもって課題に対処できるように努めている。また、効果的な実習を行うために附属病院看護部との専門委員会（附属病院看護部長・副部長はじめ看護師長全員と看護学専攻教員全員の出席による）を年数回、精神看護学領域、地域看護学領域、在宅看護学領域、助産学領域においても各実習施設との委員会を適宜開催、運営を行っている。

2. 教育活動

1) 学生について

学 部： 平成 25 年 3 月、保健学科第 12 期生の卒業式が行われ、看護学専攻卒業生 94 名（留学生 1 名、編入生 9 名を含む）

が社会人あるいはさらなる進学のため本専攻を巣立った。同年 4 月には新入生 84 名(女子 80 名、男子 4 名)と編入生 10 名が入学した。

大学院：平成 25 年 3 月に医学系研究科博士課程前期課程 17 名が修了した。また、後期課程では平成 24 年度中には 5 名に対して学位授与(満期退学後の学位授与者を含む)が行われた。一方、入学者については博士課程前期課程 16 名(基礎・臨床看護学分野 11 名、健康発達看護学分野 5 名)、後期課程 6 名(基礎・臨床看護学分野 2 名、健康発達看護学分野 4 名)であった。

2) ガイダンスについて

平成 24 年 4 月 5～9 日に、学部新入生(1 年、編入生)および新 2～4 年生に対して例年同様ガイダンスを行った。ガイダンスの内容は学習関係、学生生活および諸手続、図書・情報関係などである。同様に、大学院前期・後期新入生に対しては入学式後に学修関係、図書・情報関係についてガイダンスを行い、その後、教員や在学学生を交えて意見交換会を行った。

3) 新入生合宿研修

新入生に対する合宿研修は 4 月 14 日(土)～15 日(日)の期間に愛知県青年の家(岡崎市美合)において実施し、新 1 年生、編入 3 年生、上級生、合宿担当教員(基礎看護学領域)及び新任教員等が参加した。合宿を契機に教員や上級生と交流をもち、看護学に関する事柄や学生生活での内容について意見交換や質疑応答を行った。

4) 感染対策

看護学専攻として専攻内感染対策委員会を中心に学生ガイダンスをはじめとして、感染予防における検査やワクチン接種等の指導・実践を行っている。また、実習における感染予防対策についても、看護部や病院の感染対策窓口と有機的連携のもと、感染予防に努めている。

5) オープンキャンパス

平成 24 年 8 月 10 日(金)に大幸キャンパスで実施し、申込者数 320 名に対して来場者数は、272 名であった(対定員比 3.4)。看護学専攻の教育の特色と卒業後の進路の説明、施設内見学、在校生による学校紹介および Q&A コーナーを企画し、午前・午後ともに 2 時間ずつ実施した。アンケート結果より参加者の満足を確認でき、概略オープンキャンパスの目的を達成できた。

6) 国際交流について

学部：平成 23 年度(専攻主任：浅野)より、日本学生支援機構「留学生交流支援制度」に応募し採択され、延世大学・フィリピン大学マニラ校・上海交通大学との病院実習を中心とした短期交換留学(1 週間)による国際交流を新たに開始した。

平成 24 年度の交流実績は、Short Stay(1 月 31 日～2 月 10 日)では、延世大学ウォンジュ校 3 年生 2 名、上海交通大学 4 年(名大病院実習期間：2 月 4 日～2 月 8 日)、Short Visit フィリピン大学マニラ校 本学 4 年生 4 名(3 月 5 日～12 日)、延世大学 4 名(11 月 5 日～11 日)であった。また、学生国際交流ボランティアグループ SNUPY を中心に、名大病院鶴友會館で Farewell を開催し、1 年生を含む多くの学生と留学生との交流を図った。

大学院：名古屋大学-延世大学学術交流研究会を 11 月 23 日、東館大講義室にて開催し、看護学専攻からも 6 名(後期課程 2 名、前期課程 4 名)が研究発表を行った。その後、合同レセプションをメルパルク NAGOYA(3 階 サルビアの間)で開催し交流を深めた。

3. 研究活動

各教員が現在取り組んでいる研究課題の一部を紹介する。

《基礎・臨床看護学》

太田 勝正 教授：地理情報システムを利用した地域保健データベースの構築に関する研究

玉腰 浩司 教授：肥満をはじめとする生活習慣病の疫学的病態解明に関する研究

藤本 悦子 教授：看護技術の検証と開発、睡眠に関する研究、血流・リンパに関する研究

山内 豊明 教授：看護におけるフィジカルアセスメント教育に関するアウトカム評価研究

堀 容子 教授：在宅における家族介護者の心身の健康に関する研究、

大島 千佳 准教授：看護実戦へ向けた新しい温罨法の開発

永谷 幸子 助教：加速度からみた安全な離床援助方法に関する研究

間脇 彩奈 助教：創傷治癒、リンパ浮腫に関する研究

佐伯 街子 助教：シナリオトレーニングに関する研究

安藤 祥子 教授 : がん患者の症状マネジメント・終末期ケア・緩和ケアに関する研究
池松 裕子 教授 : 循環危機患者の自覚症状
會田 信子 准教授 : 老年者のリハビリテーションと介護予防に関する研究
大川 明子 准教授 : 在宅療養がん患者の支援に関する研究
河野 由理 准教授 : 精神障がい者の退院支援や地域ケアに関する研究
横内 光子 准教授 : 救急看護、周手術期看護、災害看護に関するケアの方法論に関する研究
登坂 祐明 助教 : 精神障がい者と家族に対するケア方法に関する研究
光行 多佳子 助教 : がんサバイバーとその家族の支援に関する研究
森 祥子 助教 : クリティカルな状態の患者のQOLに関する研究

《健康発達看護学》

浅野 みどり 教授 : スペシャルニーズをもつ子どもと家族の QOL 向上と予防的育児支援に関する研究
鈴木 和代 教授 : ライフサイクルにおける性教育に関する研究
奈良間 美保 教授 : 家族を主体とした医療者との協働による小児在宅ケアプランの実践とガイドライン作成に関する研究
入山 茂美 准教授 : 母乳育児に関する研究、若者のリプロダクティブヘルスに関する研究
田辺 圭子 准教授 : 二世代間の母子健康手帳による妊娠出産経過の関連に関する研究
赤尾 さく美 助教 : 途上国のへき地の看護師に対するフィジカルアセスメント教育の検討
山本 弘江 助教 : 周産期のメンタルヘルスと育児支援に関する研究
大塚 弘子 助教 : 小児在宅ケア、母親の育児行動に関する研究

梶田 悦子 教授 : 地域高齢者の大腿骨頸部骨折予防のための地域看護モデルの構築
榊原 久孝 教授 : 生活習慣病予防支援プログラムの開発、肥満と産業ストレスの関連研究
平井 眞理 教授 : 在宅医療におけるインターネット活用に関する研究
前川 厚子 教授 : ストーマ保有者の生きる意欲に及ぼす WOC 看護の国際比較研究
渡井 いずみ 准教授 : 就労妊婦のワーク・ライフ・バランス支援を目的とした看護モデル構築に関する研究
伊藤 尚子 助教 : 地域高齢者の健康管理に関する看護社会学的研究
岡村 雪子 助教 : 地域・老年看護学領域における研究
保利 美也子 助教(育児休業中)→馬場恵実助教(産休代替) : 訪問看護に関する研究

4. 対外的な活動

1) 平成 24 年度 (第 5 回) 国立大学保健医療学系代表者協議会看護学分科会総会の開催

平成 24 年 6 月 3 日(日)で名古屋大学看護学専攻を幹事校(看護分科会代表:浅野みどり主任)として名鉄ニューグランドホテルにて開催した。全国 42 校から国立看護系大学の代表者総勢 60 名が一堂に会し、国立大学における看護学教育に特化した課題について有意義な意見交換を行った。

2) 附属病院看護部との関係

名大病院看護部(看護部長・教育担当副部长・実習調整師長)と看護学専攻代表者(主任・副主任・実習委員長・各領域長・特任教授)とでユニフィケーション会議を原則月 1 回開催し、連携・協力体制の強化に取り組んだ。

3) 日本看護系大学協議会総会、ならびに研修会等へ代表者が出席した。

(主任 浅野みどり)

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育と研究の目標は以下の通りである。

- ・ 医療現場で使われている放射線・電磁波・超音波を利用した種々の医療機器の原理や特性をよく理解する。
- ・ 医療機器（CT、MRI、X線、核医学装置、USなど）の能力を最大限引き出すとともに、診断画像からの確かな情報を取り出せるようにする。
- ・ 治療のため人体に的確に放射線を照射できるようにする。
- ・ 医療放射線が人体に及ぼすかも知れない影響についての幅広い知識と応用力を身につける。
- ・ 専門知識ばかりでなく豊かな人間性を合わせ持つ人材を育成する。
- ・ 放射線技術科学を学ぶ人々を指導していく人材を育成する。
- ・ 医療技術者、研究者、教育者として、日進月歩する医療分野の進歩を理解し、常に新しい技術等を発信する。
- ・ 自ら医療の進歩を創生することが出来る科学者を育成する。

1. 運営

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育に関するさまざまな問題、教育研究費の予算配分等の運営は、毎月1回の専攻会議、並びに専攻教授会の合議に基づいて行われている。

2. 教育活動

学部教育：

平成24年度の新入学生は、新1年生が45名（私費留学生1名を含む）、3年次編入者は3名であった。2年生は43名、3年生は44名（編入生3名を含む）、4年生は46名（編入生3名を含む）で、4年生は12名の教員のもと、それぞれの研究室で卒業研究を行った。また、3年生以下の学生も、12名の教員が指導教員となり、勉学、生活の両面で指導を行っている。診療放射線技師国家試験は卒業生39名が受験し、そのうち35名が合格した。編入生を含む卒業生43名の進路は、医療機関に24名、企業に2名、その他3名、大学院進学が14名であった。

学部教育は、専任教員による授業の他に、非常勤講師を招いた特別講義、臨床実習、臨床現場の見学（名古屋大学医学部附属病院、愛知県がんセンターをはじめ、学生の出身地や学生の希望就職病院など）、放射線管理に関連して原子力発電所の見学（中部電力浜岡原子力発電所）など、将来、医療あるいは生産現場で役に立つと思われる教育活動が行われている。

大学院教育：

平成14年に大学院医学系研究科医療技術学専攻が創設され、平成24年度は、博士課程前期課程1年16名、2年11名、博士課程後期課程1年3名、2年1名、3年7名の計38名であった。前期課程の最終年度にあたる学生10名が修士論文を提出し、修士の学位を取得した。以下、学生名と修士論文題目を記す。

- 岩井 勇磨 : ICRPの呼吸気道モデルを用いたラドン222壊変生成物の線量評価及び線量計算ソフトウェアの開発
岩本 康史 : High Definition Multileaf CollimatorのTransmissionとTongue-and-Groove効果の検討
河野 竜司 : ホールボディカウンタ校正に用いる密封シート線源の適用性に関する検討
近藤 晋平 : X線CT検査における被射体内のX線エネルギースペクトルの解析
齋藤 優希 : デジタルマンモグラフィにおける被曝線量低減のための低線量シミュレーション画像に関する研究
柴田 有加里 : 体内で生成する娘核種の内部被ばく線量評価に関する研究
田村 命 : Microdosimetryによる治療用炭素線ビームの側方生物線量分布の評価
羽場 友信 : モンテカルロシミュレーションを用いたX線CT検査におけるCTDIファントム内線量分布の解析
林 大貴 : X線CTにおける被ばく低減機構を考慮した人体ファントム内臓器線量の詳細な評価
良知 寿哉 : 実測から算出したコリメータ散乱係数、ファントム散乱係数とMonte Carlo simulationにより計算した理論値の比較

後期課程の最終学年にあたる7名のうち2名が博士論文を提出し、博士の学位を取得した。以下、学生名と博士論文題目を記す。

- 齋藤 公明 : 環境中に分布する放射性核種に対する外部被ばく線量評価に関する研究
朝原 正喜 : 乳房撮影システムの画質評価用ファントムの画像を自動評価するためのコンピュータアルゴリズムの開発

3. 研究活動

当専攻の教員は幅広い専門分野を研究領域としているため、個々の教員が独自の研究活動を行っている。一部にグループによる研究活動、専攻以外との共同の研究活動も行っている。以下には各教員の研究領域を示し、外部と協力して実施している研究活動の一部を示す。

池田 充教授：関数解析学を応用した医用画像における画像処理・雑音解析に関する研究。ROC 解析の手法に関する研究。

石博信人教授：内部被ばく線量評価に関する研究：(a) 体外計測装置の校正法、(b) 放射性核種の体内挙動の計算シミュレーション、(c) ラドン壊変生成物の線量評価。PET 施設における職業被ばくに関する研究。

磯田治夫教授：磁気共鳴 (MR) を用いた脳機能解析・血流解析 (特に脳動脈瘤) ・心筋運動解析に関する研究。サーモサイフォン効果を具備した凍結治療プローブ開発。MR 撮像技術・画像診断ならびに神経系・頭頸部画像診断に関する研究。

今井國治教授：数理統計学及び情報理論を用いた CAD のための画質評価法の構築。高電圧下における誘電・絶縁材料の放電劣化・破壊現象に関する研究。

緒方良至助教：福島原発事故由来の環境汚染分析。空气中放射性ヨウ素濃度の高感度モニタリング装置の開発。可搬型液体シンチレーションカウンタの開発。水素同位体分離に関する研究。環境放射能の測定—特に環境レベルのトリチウムの測定に関する研究。放射線取扱施設の安全管理に関する研究。PET サイクロトロン周辺の放射化に関する研究。PET サイクロトロン室内外の中性子束の測定に関する研究。¹⁸O 水の純化处理時の空气中トリチウム濃度に関する研究。

小口宏准教授：電子線計測法 (水吸収線量計測、相互校正法)、Gel ドシメトリー、金属フィルターによる強度変調放射線治療法、放射線治療安全マネジメント。

川浦稚代助教：人体ファントム計測システムを用いた医療被ばくの測定・評価。日本人乳幼児人体ファントムの開発。X 線 CT 検査における画質と線量の関係解明。

加藤克彦教授：ポジトロン核医学に関する研究。核医学画像診断。甲状腺機能亢進症の ¹³¹I 内用療法。¹⁸F-FDG、¹⁸F-DOPA、¹¹C-choline、¹¹C-methionine、¹⁸F-FLT、¹⁸F-Na 等を利用した腫瘍 PET/CT に関する研究。¹²³I-IMP を使用した SPECT 検査における新しい低侵襲性脳血流定量測定法の確立に関する研究。各種核医学検査における定量測定に関する研究。

小寺吉衛教授：医用画像の評価法の開発。検出器、表示系を含む医用画像の解析・評価。画質の向上と被曝線量の低減を目的としたデジタル画像処理。3 次元画像表示システムの開発。

小森雅孝准教授：炭素線治療における生物学的線量分布評価。炭素線治療における中性子被ばくに関する研究。粒子線治療における照射野形成法に関する研究。高エネルギー X 線治療における線量分布評価

小山修司講師：診断領域 X 線の計測法の研究。X 線 CT の患者・術者の被ばく線量計測。診断領域 X 線のエネルギー計測。マンモグラフィにおける線量計測。

島本佳寿広教授：乳腺・甲状腺の超音波診断に関する研究。診断能に悪影響を与えないモニタの基準、読影環境、端末の操作性等を確立する研究。読影医の診断論理の妥当性を検証する研究。

津坂昌利准教授：術中 MRI を用いた脳外科手術ナビゲーションシステムの精度に関する研究。医療用液晶モニタの画質評価。携帯情報端末の画質評価と医療への応用。IT 活用による医療技術者教育システムの開発。高速画像ネットワークの技術開発と応用。暗号化通信、画像圧縮技術の遠隔医療への応用。

成田憲彦助教：骨密度測定に関する研究。放射線被ばく線量評価に関する研究。階段状ファントムを用いた LEHR・LMEGP コリメータの比較検討。99mTc-MIBI による半定量化に関する研究。

福山篤司助教：MRI 装置を用いた血管内血流速度の計測精度に関する研究。Segmented Readout-EPI を用いた Q-space imaging

に関する研究。汎用ソフトウェアを用いた T2mapping 解析に関する研究。

本間光彦助教：放射線治療領域における放射線計測法に関する研究。CRの応用利用に関する研究。人体解剖実習体の X 線撮影・CT撮影に関する研究。放射線カウンセリング。

山本誠一教授：小動物用 PET/MRI 一体型装置、PET 装置、小型ガンマカメラなどの分子イメージング機器の開発と応用。放射性セシウム検出器、イメージング装置などの環境放射能測定装置に関する研究。

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

- 1) 国際放射線防護委員会・第2専門委員会委員および線量計算に関するタスクグループ「DOCAL」委員として、リオデジャネイロでの第2専門委員会会議、アトランタでのINDOS/DOCAL2012年会議に出席する等、第2専門委員会の活動に専門家の立場から参画した(石樽)。
- 2) 独立行政法人放射線医学総合研究所・物理学的線量評価ネットワーク会議委員として、原子力災害・放射線被ばく事故時における国としての迅速な線量評価体制の整備および技術上の指針に関する審議に線量評価の専門家の立場から参画した(石樽)。
- 3) 独立行政法人放射線医学総合研究所・国連科学委員会国内対応委員会委員として、国による国連科学委員会への対応に関する審議に専門家の立場から参画した(石樽)。
- 4) 独立行政法人放射線医学総合研究所・内部被ばく線量評価調査専門委員会・検討委員会委員として、短半減期核種による事故初期段階の内部被ばく線量を把握するための検討会の審議に線量評価の専門家の立場から参画した(石樽)。
- 5) 独立行政法人日本原子力研究開発機構・国際放射線防護委員会技術的基準等の整備運営委員会委員として、ICRP2007年勧告の取り入れのための技術的基準の整備に関する審議に線量評価の専門家の立場から参画した(石樽)。
- 6) 日本保健物理学会第45回研究発表会(2012年6月、名古屋)の大会長を務めた(石樽)。
- 7) 日本放射線安全管理学会の理事を務めた(石樽)。
- 8) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌 Radiological Physics and Technology (RPT) 誌の副編集委員長の一人として編集に従事した(小寺)。
- 9) Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS) 2013 (ドイツ、ハイデルベルグ、6月26日~29日)のprogram committeeの委員としてプログラム選考に従事した(小寺)。
- 10) 第14回医用画像認知研究会(平成24年9月1日、名古屋)の大会長を務めた(島本)。
- 11) 一般社団法人日本超音波医学会評議員を務めた(島本)。
- 12) 一般社団法人日本乳腺甲状腺超音波医学会幹事を務めた(島本)。
- 13) アイルランド、ダブリンで開かれた世界分子イメージング学会において、category co-chairとして、演題の採択、口頭発表の選択、座長などを行った(山本)。
- 14) 放射線計測をテーマとした第9回堀場雅夫賞において、審査委員を行った(山本)。
- 15) 「平成24年度日本生体医工学会東海支部学術集会」の大会長として、(平成24年10月20日開催の「平成24年度日本生体医工学会東海支部学術集会」を企画・開催した(池田)。
- 16) 「平成24年度日本生体医工学会東海支部学術集会」の企画・運営に参加した(今井・川浦)。
- 17) 一般社団法人日本核学会健保委員会委員として診療報酬改定に関する要望項目の検討等に参画した(加藤)。
- 18) 外科系学会社会保険連合会委員手術委員会委員として手術報酬に対する外保連試案、新術式・改定等の検討等に参画した(加藤)。
- 19) 一般社団法人日本核学会評議員を務めた(加藤)。
- 20) 第14回国立大学診療放射線技師教育施設協議会において、国立大学診療放射線技師教育施設における教育及び研究に関する諸問題についての協議に参画した(加藤・小山)。
- 21) 第58回全国診療放射線技師教育施設協議会において、診療放射線技師教育に関する諸問題についての協議に参画した(加藤・小山)。
- 22) 一般社団法人医学物理学会の理事・計測委員・防護委員として会の企画・運営に関わり、標準計測法12を出版した(小口)。
- 23) 公益社団法人日本放射線技術学会の評議員・放射線治療分科会委員として会の企画・運営に関わり、分科会2回、放射線治療セミナーを2回開催した(小口)。
- 24) 公益社団法人日本放射線技術学会関東部会の関東RT研究会代表幹事として会の企画・運営に関わり、セミナーを5回、シンポジウムを一回開催した(小口)。
- 25) 一般社団法人医学物理士認定機構の評議員・教育委員・広報委員として会の企画・運営に関わり、医学物理士認定、医学物理教育コース認定を行い、教育講演会を2回開催し、HPの刷新を行った(小口)。
- 26) 放射線治療品質管理士認定機構認定機構の理事として会の企画・運営に関わった(小口)。

- 27) 公益社団法人日本放射線腫瘍学会の代議員として会の企画・運営に関わった (小口)。
- 28) 本放射線治療専門放射線技師認定機構の理事・広報委員として会の企画・運営に関わり、認定事業、教育セミナー開催、機関誌発行を行った (小口)。
- 29) 一般社団法人 日本生体医工学会の実施する第 2 種 ME 技術実力検定試験・試験委員として試験問題の作成、および名古屋会場実施責任者として本学において試験を実施した (津坂)。
- 30) 一般社団法人 日本医療情報学会の実施する医療情報技師検定試験において試験委員、および名古屋会場副責任者として試験の試験を実施した (津坂)。
- 31) 一般社団法人 日本医療機器学会の実施する MDIC (医療機器情報コミュニケーター) 認定制度において、MDIC 認定セミナー講師、MDIC 検定試験の試験委員として問題の作成、および名古屋会場副実施責任者として試験の実施を行った (津坂)。
- 32) 名古屋陽子線治療センターの治療技術・物理検討委員会委員長として、陽子線治療装置の治療技術の検討、精度管理 (QA/QC) プロトコールの作成に参画した (小森)
- 33) 一般社団法人日本医学物理学会の教育委員として、医学物理教育のためのサマーセミナー、講習会などの企画・運営に参画した (小森)。
- 34) 公益社団法人日本放射線技術学会第 22 回医療被ばく測定セミナー (山形大学医学部附属病院) において、X 線 CT における線量評価法について講義を実施し普及に努めた。(小山)
- 35) 日本放射線科専門医会・医会 (JCR) 2012 ミッドサマーセミナー (神戸) において、医療被ばくの評価法について講義をし普及に努めた。(小山)
- 36) 日本放射線研究連合(Japanese Association for Radiation Research; JARR)幹事として、会の運営に参与した (緒方)。
- 37) 平成 24 年 6 月 日本保健物理学会第 45 回研究発表会の実行委員 (幹事) として、会の企画・運営で、中心的な役割を果たした (緒方)。
- 38) 平成 24 年 6 月 X線作業主任者受験講習会の講師を勤めた。内容：X線の測定 (電子科学研究所主催) (緒方)
- 39) 平成 24 年 1 1 月 名城大学附属高等学校で「放射線 (能) の利用と人体への影響」と言うテーマで、講義および実験指導を行った。(スーパーサイエンス ハイスクール企画) (緒方)
- 40) 平成 24 年 1 2 月 静岡県立浜松南高校 高校生のための放射線実習セミナー講師・実習指導 (日本原子力文化振興財団) (緒方)
- 41) 日本放射線カウンセリング学会会長として、学会運営を行うとともに、6 月 (宮崎市) と 3 月 (東京都) のカウンセリングセミナー、9 月 (名古屋市) の学術大会、学会誌の発刊、ならびにメールおよび電話での放射線被ばくカウンセリングを行った (本間)。
- 42) 社団法人愛知県放射線技師会理事として、会の企画・運営に関わった (本間)。

(主任 加藤克彦)

医療技術学専攻病態解析学講座・検査技術科学専攻

本講座は、高度に専門化した医療に対応できる基礎力と応用力を備え、かつ医療人として不可欠な倫理観に裏付けられた豊かな人間性を備えた臨床検査技師、さらに検査技術科学を学問として追及する教育・研究者を育成することを目的としている。病態解析学講座は、環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学の6つの学問領域からなり、先端的な研究、学際的な病態解析、技術開発を進めるとともに、先端医学につながる病態解析学研究を遂行できる能力の育成、指導的立場に立つのに必要な高度な専門知識・技術を有する人材を育成することを目的としている。

1. 運営

本講座は大講座として、学問領域間の壁をなくし、講座が一丸となって運営している。講座の運営は全教員が参加する講座会議の決定に従って行われた。講座会議は第1と第3、ならびに第4水曜日の17時から開催された。

2. 教育活動

- 1) 4月に第15期の入学生43名(推薦入学生17名、前期日程入学生26名)を迎えた。
- 2) 4月の新入生ガイダンスには講座主任、学生生活委員、教育委員、教員と1年生全員が参加し、専攻の教育と学生生活のガイダンス、教員の紹介、指導教員の紹介、学生の自己紹介などが行われた。
- 3) 4月の第13期編入生は入学者が無かった。
- 4) 5月11日に第12期生の臨地実習を充実させることを目的に医学部附属病院検査部の教員および技師との合同会議(臨床検査専門委員会)を開催した。
- 5) 5月16日には検査技術科学専攻の2年生が中心になって教員と共に新入生歓迎会を大幸厚生会館にて開催した。
- 6) 8月28日に第14回の3年次編入試験を行い、1名の合格者を決定した。
- 7) 8月29日に第12回大学院医学系研究科医療技術学専攻病態解析学分野(博士前期課程)の入学試験を実施し、4名の合格者を決定した。また、30日には第10回の大学院同(博士後期課程)の入学試験を実施し、13名の合格者を決定した。
- 8) 平成25年3月には本専攻の第12期生の卒業生として、編入生を含め42名を社会に輩出した。そのうち11名が大学院博士前期課程へ進学し、就職希望の30名は主に国公立大学病院、公私立病院等の検査部に就職し、就職率は100%であった。
- 9) 第12期生の第59回臨床検査技師国家試験(平成25年2月20日)の準備として全教員による教育指導と6回の模擬試験を実施した。12期生の第59回臨床検査技師国家試験合格率は97.6%であった。

3. 研究活動

本専攻では4月5日に博士前期課程に21名の第11期生、博士後期課程に2名の第7期生を迎えた。5月23日に2名のD3院生による短期修了のための臨時大学院医療技術学専攻病態解析学分野博士後期課程研究発表会(予備審査会)を行った。平成22年2月9日に第7回の病態解析学分野博士前期課程研究発表会(修士論文発表会)を開催し、前期課程・第10期生名が発表した。学部関係では5月20日に第11期生による卒業研究発表が開催された。以下に各講座における卒業研究発表内容を示す。

【病態化学解析学部門】 指導教員：涌澤 伸哉、上山 純

1. Caco-2細胞におけるコレステロール輸送系に及ぼすEGCGの作用
2. サイトカインの肝癌由来細胞におけるヘプシジン発現への影響
3. 胆汁酸によるHepG2細胞の抗酸化システムへの影響
4. パラオキシナーゼ1遺伝子多型と腎機能評価指標との関連
5. 殺虫剤撒布職域従事者における尿中クレアチニン分析値の検討
6. ガスクロマトグラフィー質量分析による尿中ネオニコチノイド系殺虫剤代謝物の高感度分析法の検討
7. 各職域従事者における尿中有機リン系殺虫剤代謝物量の特徴

【病因病態解析学部門】 指導教員：川部 勤、川村 久美子、松島 充代子

1. β -lactamase産生グラム陰性桿菌の迅速簡易検出法としてのPenta well法の評価

2. 体細胞高頻度突然変異の誘導における CD40 分子の役割
3. 活性化肺胞マクロファージに対するケルセチンの抑制効果
4. クリシンのアレルギー反応抑制効果と作用機序
5. フラボノイドによる抗線維化作用の機序

【環境病因解析学部門】 指導教員：近藤 高明、石川 哲也

1. 成人集団での赤血球脂肪酸構成と炎症指標および動脈硬化指標との関連
2. 成人集団での血清脂肪酸構成と炎症指標および動脈硬化指標との関連
3. 高齢者の食欲不振と免疫・ホルモン環境の変化との関連について
4. 炎症環境下におけるヒト肝癌細胞株の免疫修飾能の解析
5. 間葉系幹細胞の免疫調整作用の解析と肝疾患への治療応用
6. ウイルス可視化技術を用いた B 型肝炎ウイルスの細胞内侵入機構の解析
7. B 型肝炎ウイルス排除に向けた高効率免疫法の確立

【形態情報解析学部門】 指導教員：長坂 徹郎、川井 久美、橋本 克訓

1. 胞状奇胎における絨毛の形態計測学的解析

【生体生理解析学部門】 指導教員：永田 浩三、平山 正昭、伊藤裕美

1. 新規メタボリック症候群ラットモデルを用いた pioglitazone の心筋障害及び体脂肪に及ぼす影響の検討
2. Dahl 食塩感受性ラットにおけるアンジオテンシン受容体拮抗薬と L/N 型 Ca 拮抗薬の併用投与による心保護効果の検討
3. 健常者に対するラクツロース、乳酸菌負荷時の水素産生の検討
4. パーキンソン病患者における QOL と非運動障害の関連について
5. 視覚刺激の差異による視覚誘発電位の変化・脳磁図を用いた第一次視覚野の解析

【分子病態解析学部門】 指導教員：村手 隆、小嶋 哲人、高木 明

1. 抗がん剤 Daunorubicin (DA) による DNA 障害と耐性株における抵抗性獲得機序の解明
2. UT-7/Epo 細胞株における Sphingosine kinase 1 の発現調節機序
3. 血清除去ならびに Hypoxia に対する Sphingosine kinase 発現調節機序の解明
4. Resveratrol による Acid sphingomyelinase 発現調節機序の解析
5. 先天性 FVII 欠損症の F7 遺伝子解析
6. 先天性 Protein C 欠損症の PROC 遺伝子解析
7. 先天性アンチトロンビン欠損症の SERPINC1 遺伝子解析
8. 血友病 B 症例における血液凝固第 IX 因子遺伝子解析

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

A) 国際交流

11 月 22 日～24 日に、大幸キャンパスで開催された延世大学（韓国）との国際交流事業では、双方の病態解析学講座から 6 名ずつの大学院生が研究成果について口頭発表と質疑応答を行った。この交流事業組織委員会には近藤高明教授と伊藤裕美助教が出席し、企画や運営の役割を担った。

川部 勤教授と松島充代子助教は名古屋大学大学院工学研究科式田光宏准教授と共同研究のもと開発した微細気流計について医学部側の成果を福岡で開催された 22th Congress of Interasthma Japan North Asia で、また工学部側の成果を 2012 年 10 月に台湾で開催された IEEE SENSORS で共同発表した。また、名古屋大学大学院工学研究科西澤典彦教授との共同研究のもと 2013 年 2 月には米国 San Francisco で開催された SPIE BiOS 会議において共同発表した。

小嶋哲人教授は、10 月にメルボルン・コンベンション・エキシビジョン・センター（豪州）で開催された第 7 回アジア太平洋血栓止血学会（APSTH）・に出席し、保健学科における指導大学院生 2 人（前期課程 2 年・村田萌、奥山恵理子）によるポスター演題、ならびに平成 23 年度博士前期課程を修了した指導学生（藤田絢子：現・名古屋大学医学部附属病院検査部所属）による口演演題を共同演者として発表した。なお、後者は APSTH International Emerging Investigator Award を受賞した。

永田 浩三教授は International Society for Heart Research 日本部会（2012 年 10 月）において研究発表を行った。

上山純准教授は名古屋市立大学大学院医学系研究科上島通浩教授および東北大学大学院医学系研究科と共同研究のもと開発した使い捨てオムツを利用した尿中化学物質の高感度分析法を 2012 年 5 月にイギリスで開催された 7th International Conference on the Science of Exposure Assessment Edinburgh で共同発表した。

B) 大学間交流—国立大学臨床検査技師教育協議会—

平成 24 年度は群馬大学大学院保健学研究科を会長校として、5 月 25 日（金）に第 49 回国立大学臨床検査技師教育協議会が開催された（出席者：川部教授、涌澤教授）。主な議題：1）役員の選出について、2）平成 24 年度予算案について、3）日本臨床検査学教育協議会の機能強化について、4）民間業者が実施した、臨床検査技師国家試験に関わる問題点について、5）その他として本協議会における国家試験問題基準検討の中止と国家試験問題基準検討委員会は今後学生の進路状況の統計を取り纏め本協議会で報告することについて審議した。承合事項としては、1）学部卒業生、大学院修了生(修士・博士)の進路状況について、2）3 年次編入試験合格基準について、3)その他として秋入学に関する情報などを話し合った。また、次期会長校として、本協議会の内容を第 7 回国立大学保健医療学系代表者協議会で主任の川部教授が報告した。

C) 地域との連携

石川 哲也教授は、長寿医療研究開発費による研究課題「高齢者の低栄養状態における発症要因および消化機能異常の関与とその原因の解明に関する研究」（主任研究者：国立長寿医療研究センター消化機能診療部 松浦俊博部長）について平成 23 年度より分担研究者として参加している。日本肝臓学会評議員、日本消化器病学会東海支部例会評議員を務めており、平成 24 年 6 月 17 日には日本消化器病学会北陸支部例会において「ウイルス肝炎治療の現状と展望」というテーマで教育講演を行った。

川部 勤教授は、松島充代子助教とともに平成 22 年度から開始した愛知県「知の拠点」重点プロジェクト P3 超早期診断技術開発プロジェクトの研究者として名古屋大学大学院情報科学研究科間瀬健二教授や地元企業とともに医学部側代表として共同研究に参加している。また、名古屋大学大学院工学研究科武田光宏准教授と微細気流計の開発を、さらに名古屋大学大学院工学研究科西澤典彦准教授ならびに HOYA 株式会社との共同研究を継続して行った。3 月に第 15 回名古屋呼吸器領域卒後専門教育セミナーのプログラム委員として、セミナーを企画実行した。また、愛知県公害健康被害認定審査会会長として申請書類の審査に責任をもち、3 月には 24 の会員自治体から 108 名の参加者を迎え第 42 回大気汚染公害認定研究会を主催した。日本アレルギー学会代議員、日本アレルギー協会東海支部編集委員として、また、東海分子呼吸器研究会、東海喘息研究会、東海成人喘息研究会、呼吸器疾患研究会等の世話人として呼吸器・アレルギー疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化、啓発活動の推進に尽力した。

小嶋哲人教授は、愛知県特定疾患研究協議会において血液凝固異常症調査研究ならびに門脈血行異常症調査研究を行った。また、コアグ研究会（平成 24 年 4 月 19 日）、第 49 回 東海循環器病診連携フォーラム（平成 24 年 8 月 18 日）、名古屋大学・生理学研究科合同シンポジウム（平成 24 年 9 月 29 日）、平成 24 年度愛知県特定疾患研究協議会・難病教育講演会（平成 24 年 11 月 5 日）などの講演会を通して、地域への研究活動の情報提供、啓発活動を行った。

近藤高明教授は、平成 14 年から愛知県犬山市での「健康プラン推進委員会」の委員として地域の健康増進活動に学術専門家として協力してきたが、平成 24 年度は「みんなで進める犬山市健康プラン 21（健康日本 21 犬山計画）」の最終評価年にあたり、評価作業の総括責任者として責務を担った。8 月下旬に北海道八雲町で 3 日間実施された「町民ドック」は多くの大学と町の共同で疫学調査を兼ねた事業であり、スタッフの一員として 2 名の大学院生と参加し、その成果を町民の予防活動に還元するよう努めた。8 月と 3 月には、愛知県内の殺虫剤散布従事者を対象とした健康調査と結果判定作業に参加した。10 月 20 日（土）の大幸デイ（大幸キャンパスで実施されるホームカミングデイ企画）には、地域貢献委員会委員長として市民公開講座の企画と司会を担当し、「感染症をめぐる最近の話題」というテーマで 2 名の講師に講演を依頼した。

永田 浩三教授は名古屋大学医学部学友会岐阜支部総会（2012 年 8 月）において講演した。第 77 回日本循環器学会学術集会（2013 年 3 月）において高血圧（基礎）の英語口頭発表セッションの座長を務めた。日本高血圧学会評議員、日本心不全学会評議員、日本循環器学会東海支部評議員、日本内科学会東海支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。また、東海心筋代謝研究会の世話人および名古屋大学分子細胞循環器研究会の幹事として循環器疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化に尽力した。2012 年 4 月より名城大学附属高等学校学校評議員として学校運営及び高大接続のために尽力している。

川村久美子准教授は、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授として、日本ガイシ株式会社との共同研究（新規プラズマ滅菌装置の開発）に参加している。1 月 31 日に東山キャンパスで開催された第 2 回予防早期医療創成センターワークショップにて、共同研究で得られた成果を発表するなど、産学官の連携および融合研究の発展に尽力した。また、10 月 20 日に大幸キャンパスで開催された市民公開講座において、「薬剤耐性菌の広がりとその予防にむけて」と題した講演をおこない、そのなかで、薬剤耐性菌の増加の背景を解説するとともに市民一人ひとりが実践できる予防策について紹介した。

（主任：川部 勤）

1) 前文

理学療法学は、身体組織および機能の障害、あるいは能力低下を持ちながらも、質の高い人生を送るために不可欠なリハビリテーション医療に関する研究推進ならびに高度専門教育を行う。そのために、障害の原因となる病態や機能障害の発生機序を生理学的に解明する基礎研究とともに、障害の効果的回復や機能維持、更には疾病・障害の再発予防に関する臨床研究を積極的に推進し、質の高い理学療法の基盤を創造する。また、学内他専攻はもとより、他大学ならびに海外の学術・研究チームと積極的に交流し、国際的水準で研究推進ならびに後進の指導を行い得る人材の育成に努めるものである。

2) 運営

本専攻は、今年度から大学院の重点化に伴い、リハビリテーション療法学専攻理学療法学講座として組織されている。運営は、全教員（総数9名）による講座会議（毎週水曜日12時から開催）における協議・決定にしたがい進められている。さらに、同じ専攻である作業療法学講座と合同の大学院会議（毎月第1、3水曜日）を行っている。

3) 教育活動

学生については、大学院博士前期課程では理学療法学領域、学部においては理学療法学専攻の名称が用いられる。なお、大学院博士後期課程はリハビリテーション療法学専攻一つであるため、便宜上、理学療法学関係と記述している。

平成24年

学部生としては、4月に保健学科理学療法学専攻第16期生として21名の学部学生を迎え入れた。選抜方法による内訳は、推薦入学8名、前期日程試験入学13名、また、2年次編入に合格した学生3名が加わった。性別では男子学生10名、女子学生11名であった。大学院には、前期課程に11名（一般選抜10名）、後期課程に4名が入学した。こうして、理学療法学専攻としての学生数は、1年生21名、2年生25名、3年生23名、4年生24名、大学院博士前期課程リハビリテーション療法学専攻理学療法学分野の1年生11名、2年生8名、後期課程のリハビリテーション療法学専攻理学療法学関係は1年生4名（一般選抜0名）、2年生4名（一般選抜4名）、3年生4名（一般選別2名）となった。

新学期には4月5日（木）に入学式、編入2年生に対する編入ガイダンス、大学院生ガイダンス、6日（金）に新入生、編入3年生および在校生（各学年）ガイダンスをおこなった。また、作業療法学専攻と共同で、全教員との顔合わせと新入生に対して学生生活のガイダンスを行った。在校生ガイダンスでは、共通科目については理学療法学専攻・作業療法学両専攻合同で、専門科目については理学療法学専攻単独で、各学年別に1時間ずつを使い、本年度のカリキュラムの説明、学生生活のルールの再確認を行った。これらにより、本専攻に所属する学部学生、大学院生のすべてに対して、カリキュラムの説明、学生生活のルールの説明・再確認がおこなわれた。説明は主任、教育委員、学生生活委員、授業担当教員が担当した。

4月14日（土）には、専攻内での新入生歓迎会を行った。新2年生が幹事となり、土曜日半日を使い、在校生、新入生、教員が参加し、全員の自己紹介、懇親会（大幸厚生会館）を通じて人間的交流・連携の強化を達成した。

4月中旬から臨床実習Ⅱ、Ⅲが始まる4年生に対し、各教員が臨床実習に必要な項目についての学内実習をおこない、4月23日（月）から実際の医療機関での臨床実習が始まった。この実習は各種疾患を観察し、臨床実習指導者のもとに基本的評価および理学療法プログラムの作成を目的としている。学生は多くの不安を抱きながら、実習先に向かったが、5週ごとの反省会で、種々の問題点などが指摘されながらも、全員無事この実習を終えることが出来た。4年前から開始した臨床実習前の学内実習もあって、各学生とも実りの多い臨床実習を経験できたものと思われた。臨床実習は7月6日（金）に終了した。4年生は7月9日（月）に臨床実習反省会とともに、地域理学療法学実習のガイダンスをおこなった。地域理学療法学実習は訪問理学療法の実際を見学できる貴重な実習である。

夏季の集中実習として8月6日から9日の4日間、病態人体解剖実習が行われた。これには医学部主催の人体解剖トレーニングセミナーで解剖されたご遺体が提供された。学生にとっては人体構造と機能の理解を深めるとともに、ご遺体に対する感謝の念を通して人の命の尊厳を考え、将来の医療人としてのあり方を考えるよい機会となった。

8月28日（火）には平成25年度2年次編入学、29日（水）には大学院博士前期課程、30日（木）には同、後期課程の入試を実施し、2年次編入に3名、リハビリテーション療法学専攻博士前期課程理学療法学分野に9名（一般選抜6名、社会人特別選抜3名）、博士後期課程理学療法学関係に1名（一般選抜1名）が合格した。また博士後期課程においては定員に満たなかったため2次募集を実施、平成25年1月31日（木）に入試を行い、博士後期課程理学療法学関係に3名（一般選抜0名）が合格した。

9月26日（水）には博士後期課程の論文発表会（予備審査会）が本館第4講義室で行われ、理学療法関係からは2名の学生が発表した。

学年を超えた学生間、学生と教員が密に交流する機会として、1泊2日の日程で岐阜県多治見市の文化施設「地球村」へ出かけて講演会、親睦会、バーベキューを楽しんだ。これには約70名の学生が参加し、専攻の絆を深めた。

韓国延世大学との交流会が企画され、教員と大学院学生計2名が来日し、11月23日から2日間にわたって学術交流と親睦を深めることができた。

後期授業では4年生の卒業研究の後半部分が再開され、11月28日（水）に本館第2講義室において最終発表会が開催された。23題の発表があり、教員ならびに在学生との活発な討論が交わされた。1、2年生にとっては将来の自身の研究の参考になっ

たと思われる。また、3年生の卒業研究中間発表会は平成25年3月8日（金）に本館第2講義室で行われた。合計21題の発表があり、1、2年生からの質問も多く、活発な発表会となった。中間発表会終了後に、3年生に対し大学院ガイダンスと就職ガイダンスがおこなわれた。

大学院では、平成25年2月14日（木）に作業療法学専攻を含むリハビリテーション療法学専攻理学療法分野（博士前期課程）10期生の修士論文ならびに博士後期課程博士論文発表会が行われ、前期課程8題、後期課程2題、合計10題の発表があった。また、3月9日（土）には前期課程1年生（11期生）の中間報告会が行われ、理学療法分野から11題の発表があった。博士前期課程修了者は8名で、就職7名、博士後期課程進学者1名であった。博士後期課程修了者のうち、2名が学位を取得した。

2月24日（日）には理学療法士国家試験が施行され、本専攻学部平成24年度卒業生22名が受験し22名が合格した。3月25日（月）には保健学科第12期生の卒業式が執り行われた。本専攻は編入学生を含め22名の新卒業者を世に送り出した。そのうち18名が病院に就職し、4名が大学院へ進学であった。

4) 研究活動

各教員の研究テーマは、以下の通りである。

河村守雄 教授：実験的異所性骨化と関節運動および不動化の関係、骨形成因子の特性と臨床応用、脊髄損傷モデルマウスの病態、慢性腰痛症状保有者の再発予防対策

鈴木重行 教授：培養筋細胞を用いた機械的刺激の影響、筋ストレッチングと疼痛抑制法の臨床的効果、女性尿失禁に対するバイオフィードバック療法、糖尿病と関節拘縮モデルラットを用いた理学療法効果の検証

山田純 生教授：循環器疾患の運動介入・疾病管理、骨格筋パワーを用いた運動処方、運動習慣化を促進する指導方策、電気刺激療法と運動耐容能、運動中の換気様式に関する研究

鳥橋茂子 教授：マウスES細胞を用いた骨格筋、神経細胞の形成機構の研究、間葉系幹細胞の研究、消化管の発生研究

内山 靖 教授：姿勢・運動の制御と運動学習に関する研究、症候障害学、理学療法学教育に関する実践的研究

河上敬介准教授：機械刺激に対する培養細胞の形態応答のメカニズムの解明、伸張刺激による骨格筋の可塑性のメカニズム、筋・筋膜連結の形態と臨床的意義

石田和人 講師：脳出血モデル動物における中枢神経の病理変化と運動療法の効果に関する研究、ニューロン障害の初期像の解析とその予後に関する研究、糖尿病モデルラットを用いた理学療法効果の検証

太田 進 助教：骨関節のバイオメカニクス、高齢者の運動機能向上、スポーツ傷害予防、介護予防に関する研究

李 佐知子助教：脳血管障害後の痙性発症メカニズムの研究、大脳皮質損傷後の運動機能回復メカニズムの研究

5) 対外的な、または社会と関わりのある活動

臨床実習指導者連絡協議会（スーパーバイザー会議）は7月25日（水）に行った。内容は、臨床実習全般（理学療法イントロダクション、同コミュニケーション、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）についての報告と反省、臨床実習前の学内実習である基本的臨床技能実習（OSCE）試験の実際とその学習効果、さらに臨床実習Ⅱ、Ⅲについて本学の理念や目的と実習施設における実習目的との差などについて協議した。更に、後期より始まる臨床実習Ⅰ、理学療法コミュニケーション、同イントロダクションについて協議した。

専攻代表が出席した学外関係会議は、臨床実習東海地区理学療法士養成施設連絡協議会（平成24年7月7日（土）、会場：愛知医療学院短期大学）、第15回国立大学理学療法士・作業療法士教育施設協議会（9月27日（木）・28日（金）、担当：神戸大学）である。

毎年夏に催される名古屋大学・大学説明会（オープンキャンパス）は8月10日（金）に行われた。保健学科は大幸キャンパスを主会場とし、保健学科全体の説明がなされた後、参加した高校生に本専攻の特徴などについて主任の内山教授が説明した。その後、本専攻主催の説明会には167名が参加し、教員と学生が施設を案内し、質問に答えた。質問も多く、高校生の興味の深さが伺われた。

鳥橋教授、河上准教授が中心となり、保健学科解剖実習室を使用して、東海地区の理学作業療法学を含む13施設から延べ550名の学生が解剖標本見学の受託実習を行なった。

11月8日（木）には防災訓練が行われ、保健学科全体で、教職員、学生が多数参加し、救助袋による避難訓練、初期消火訓練として消火器の取扱説明、消化栓による放水などがおこなわれた。

その他、大幸医療センターでの相談外来は、河村教授の腰痛相談室、鈴木教授の女性尿失禁相談外来が引き続き行われた。

以上

（主任：内山 靖）

リハビリテーション療法学専攻作業療法学講座及び作業療法学専攻(以下「講座」)は、作業療法に関する学問的体系の確立と高度専門職業人の育成、および教育者、研究者の育成を目的として設置された。本講座は、作業療法士専門職教員と医師教員から構成され、それぞれの専門を活かした教育・研究活動を通して作業療法学の発展に努めている。

1. 運営

平成 24 年度の本講座は、澤田教授（主任）ほか 3 名の教授、准教授 2 名、講師 1 名、助教 2 名より構成されている。本講座の運営については、全教員が参加する会議（毎週水曜日開催）によって教育および研究活動の具体的な方針を決定している。会議では、名古屋大学の学年歴および保健学科の諸行事に合わせて本講座の年間行事、事業についての計画とその計画進行状況の確認をはじめとして、予算に関する事案、学生の教育に関する事案（成績関連、単位認定、進級関連、卒後進路など）、学生生活に関する事案、臨床実習に関する事案（実習計画、臨床実習施設との連携など）、その他保健学科全体の抱える諸問題について本講座としての方針や考え方を討議決定している。特に、個々の学生への対応など具体的な問題について詳細な検討や問題解決への方策を決定している。

また、人事など教授専任事項については月 1 回の講座教授会議にて審議を行っている。この会議は構成メンバー全員の意見の一致を原則として運営されている。

リハビリテーション療法学専攻で密接な連携関係にある理学療法学講座と共に毎月両講座会議を設け、作業療法学講座・理学療法学講座の全教員が参加し、両講座共通の課題に取り組み、連携・協力を図っている。

大学院運営の機構としては、作業療法講座は理学療法講座とともにリハビリテーション療法学専攻の会議を月に 1 回開いている。

2. 教育活動

作業療法学専攻の平成 24 年度入学生は、21 名。選抜方法による内訳は、推薦入試で入学した学生は 8 名、前期日程試験で入学した学生は 13 名。性別では男子学生 4 名、女子学生 17 名であった。また平成 19 年度より募集を開始した 2 年次編入学生は 3 名。性別では男子学生 1 名、女子学生 2 名であった。

平成 24 年度の大学院博士課程前期課程作業療法学分野には 6 名が入学した。内訳は、一般選抜による入学生は 3 名、社会人特別選抜による入学生 3 名。また、博士課程後期課程作業療法学分野には 1 名が入学した。

○ 平成 24 年度の大学院、学部の教育活動

1) 24 年 4 月 5 日の入学式以後、5 日～6 日：学部新入生・編入生および大学院新入生のガイダンスを実施している。毎年度始めには新入生および編入生のみならず在校生各学年別に年度当初ガイダンスを実施し、当該年度における教育内容、学生生活に関する説明と確認を行っている。近年では、大学生活における安全衛生に関する諸注意、大学生として守るべき個人情報に関する注意など、情報化社会に対応した諸注意が重要であり、この点にも留意したガイダンスとなるよう努めている。大学における学修と生活の基本的内容については作業療法学講座および理学療法学講座と合同で行い、個別の内容について講座別にガイダンスを行っている。この時期 4 年生については臨床実習が既に始まっているために、ガイダンスは前年度末までに行われている（下記）。

2) 平成 24 年 4 月 21 日～22 日：犬山国際ユースホステルでのガイダンス。通称犬山ガイダンスは、一泊二日の日程で行われる学部新入生・在校生合同（学部 4 年生を除く）の年度当初ガイダンスである。本年度も昨年と同じく愛知県犬山市犬山国際ユースホステルで開催した。新入の学部学生が円滑に快適で充実した学生生活を送るという目的で開催され、教員や 2 年生 3 年生先輩からの公私的な示唆や助言などを通して行われた。同時に学年相互の交流・親睦を目的として種々のイベントを開催した。

3) 平成 24 年 4 月 1 日から 8 月上旬：4 年生臨床実習実施。学部 4 年生を対象とし最終年次前期中、学内外の臨床施設（名古屋大学医学部附属病院を含め 50 施設）にて臨床実習を行った。実習期間を 3 期に分けて臨床実習 I（身体障害分野）、臨床実習 II（精神障害分野）、臨床実習 III（発達障害分野および老年期障害分野）の医療機関・施設で臨床実習を行なった。総計 18 週間の実習を行った。4 年生の学外臨床実習に際しては、各施設に担当教員を配置し、実習学生の学修状況や体調、実習の進捗状況を把握するように努めた。学生の実習進捗状況はメールおよび毎週の会議で報告され、問題の生じた事例については、全教員で検討し、指導教員、実習担当教授、施設担当教員、実習担当教員が対応に努めた。

- 4) 平成 24 年 7 月 4 日：博士課程後期課程大学院生研究課題中間発表会。リハビリテーション療法学専攻作業療法学分野 2 年生に在籍する大学院生（2 名）が研究テーマについての進捗状況を報告した。研究発表会では今後の研究方針について教員からアドバイスがなされた。
- 5) 平成 24 年 8 月 10 日：オープンキャンパス開催。大幸キャンパスにおいて保健学科全体および作業療法学専攻の大学説明会を実施した。説明会参加者に対して、講義室や実習室等を案内し、本学における本専攻の教育理念、方針、具体的教育内容について説明した。
- 6) 平成 24 年 8 月 28 日：学部 2 年次編入生入学試験。
- 7) 平成 24 年 8 月 29 日：大学院博士課程前期課程入学試験。
- 8) 平成 24 年 8 月 30 日：大学院博士課程後期課程入学試験。
- 9) 平成 24 年 9 月 14 日：卒業研究中間発表会（学部 4 年生）。卒業研究の途中経過の報告と教員による指導の機会として行われた。
- 10) 平成 24 年 9 月 18 日～27 日：作業療法入門実習（学部 1 年生）。本専攻に入学してから最初の臨床実習である。作業療法における主要な分野（身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、老年期障害分野）の関連の機関・施設 6 ヶ所の見学実習を行なった。
- 11) 平成 24 年 9 月 18～12 月 12 日：作業療法基礎学実習（学部 2 年生）。作業療法の対象となる施設や対象者を理解する目的で 2 年後期に実施している。学生は、身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野及び老年期分野の 4 領域の医療機関・施設のうち 3 か所で実習をした。1 か所の実習は 3 日間とした。
- 12) 平成 24 年 11 月 22 日～24 日：第 3 回名古屋-延世大学大学間学術研究交流会が名古屋大学大幸キャンパスで開催され、作業療法学分野大学院生 5 名、延世大学大学院生 5 名の研究発表が行われた。
- 13) 平成 24 年 12 月 8 日：卒業研究発表会（学部 4 年生）。卒業研究の最終発表会であり、続いて論文の作成が行われた。研究発表会の内容は、卒業研究論文集として発刊した。
- 14) 平成 25 年 1 月 27 日～2 月 2 日：作業療法学分野大学院生 2 名が延世大学大学院へ短期留学を行った。
- 15) 25 年 2 月 11 日：学部の推薦入学試験。
- 16) 25 年 2 月 14 日：大学院博士課程前期課程および後期課程学位論文発表会。作業療法学分野からは博士課程前期課程 7 名、後期課程 2 名が発表を行なった。
- 17) 25 年 2 月 28 日：臨床実習指導者会議。4 年次に行われる臨床実習での実習協力施設の実習指導者を招いて、臨床実習指導者会議を開催した。議題は主として平成 24 年度臨床実習報告、25 年度実習計画であり、学外の実習指導者と本専攻教員の意見交換等を行なった。
- 18) 25 年 2 月 25-26 日：一般選抜前期日程入学試験。
- 19) 25 年 3 月 1 日：理学療法士作業療法士国家試験実施。本専攻から卒業予定者 21 名が合格した。
- 20) 25 年 3 月 2 日：大学院説明会開催。一般学生 13 名（名大生 12 名、他大学 1 名）が参加した。
- 21) 25 年 3 月 9 日：博士課程前期課程中間発表会。前期課程 1 年在籍の 6 名が現在の研究状況を報告した。
- 22) 23 年 3 月 25 日：学部および大学院卒業式。本年度は学部学生 21 名（男性 7 名、女性 14 名）が卒業した。大学院リハビリテーション療法学専攻作業療法学分野では修士号 7 名、博士号 2 名の取得があった。

○ 平成 24 年度、若手研究者外国出張・海外研修の推進

平成 25 年 2 月 4 日：作業療法学講座の上村純一助教が研究および大学院教育内容の視察を目的にオーストラリア (Florey Institute of Neuroscience and Mental Health (Melbourne Brain Centre)、La Trobe University) へ出張した (3 ヶ月間)。

3. 研究活動

本講座では作業療法各分野および基礎的研究各分野における研究が大学院教育とともに行われている。研究は教員による個人研究が中心であるが、企業や他施設との共同研究も行われている。

(1) 共同研究

- 1) 厚生労働省難治性疾患克服事業 (スモン患者の QOL に関する研究：寶珠山・清水・上村・星野)
- 2) 厚生労働省老人保健健康増進等事業 (寶珠山)
- 3) 大学共同利用施設磁気計測装置 (生理学研究所) における共同研究 (非侵襲的脳機能計測法を用いた多種モダリティー刺激による誘発脳反応と皮質間連絡線維伝導の計測) (寶珠山)
- 4) 日本語入力 BCI システムの臨床応用の研究 (工学研究科) (寶珠山)
- 5) 青年期の精神病理学的研究 (学生相談総合センターと共同研究) (鈴木)
- 6) ASD 児の情動的コミュニケーションを基盤にした作業療法の効果についての研究 (京都:花ノ木医療福祉センター・辛島)
- 7) 中高年者の高次脳機能に関する長期縦断的資料を基盤とする神経心理学的研究 (関西福祉科学大学、医学系研究科・整形外科) (伊藤)
- 8) 統合失調症に対する認知リハビリテーションの開発とその効果検証に関する研究 (医学系研究科精神医学) (星野)

(2) 個人研究

- 1) 精神障害の時代変遷に関する研究 (鈴木)
- 2) 精神障害と社会との連関に関する研究 (鈴木)
- 3) 発達障害の青年期に関する研究 (鈴木)
- 4) 自閉症スペクトラム児の情動的コミュニケーションを基盤とした作業療法の効果 (辛島)
- 5) 特別支援教育と作業療法 (辛島)
- 6) 特別支援教育における机上課題の遂行を促すための座位と課題内容 (辛島)
- 7) 重度知的障害者の生活の質と作業療法 (辛島)
- 8) 運動と体性感覚誘発脳反応に関する研究 (寶珠山)
- 9) 意識と感覚情報処理能力に関する研究 (寶珠山)
- 10) 運動イメージの評価法開発に関する研究 (澤田)
- 11) ボツリヌス菌毒素投与後の作業療法介入有効性に関する研究 (澤田)
- 12) 課題および環境の変化に対応する上肢到達運動の多様性に関する研究 (澤田)
- 13) 上肢の左右両側運動の運動特性に関する研究 (澤田)
- 14) 移乗動作における認知機能と運動機能の同時処理に関する研究 (清水)
- 15) 自己関連情報に関する心理的処理特性に関する研究 (清水)
- 16) 中手指節関節の可動域制限が日常生活活動に及ぼす影響に関する研究 (清水)
- 17) 高次脳機能障害作業療法の効果に関する研究 (酒井)
- 18) 作業療法課題難易度と脳賦活に関する研究 (酒井)
- 19) 視知覚認知機能評価の開発に関する研究 (酒井)
- 20) 日常活動と QOL との関連に関する研究 (伊藤)
- 21) 前頭葉機能検査に関する研究 (伊藤)
- 22) 日常活動と運動機能及び認知機能との関連に関する研究 (伊藤)
- 23) 高次脳機能障害者の自動車運転に関する研究 (伊藤)
- 24) 精神障害者の就労支援に関する研究 (星野)
- 25) 精神障害領域における作業療法士の専門性と役割に関する研究 (星野)
- 26) うつ病女性の家庭復帰における作業療法介入に関する研究 (星野)
- 27) 人の脳における言語情報処理能力に関する研究 (上村)
- 28) 運動イメージ時の脳反応の研究 (上村)

4. 対外的な、または社会と関わりのある活動

- 1) 平成 24 年 10 月～12 月 第 1～7 回愛知県作業療法士会現職者共通研修（上村）
- 2) 平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月 名古屋市介護保険認定審査会（伊藤・清水・上村）
- 3) 平成 24 年 4 月～26 年 3 月 名古屋市教育委員会特別支援教育指導室スーパーバイザー(辛島)
- 4) 平成 24 年 4 月～27 年 3 月 国立大学 PT、OT 教育施設協議会理事(辛島)
- 5) 平成 24 年 4 月～25 年 3 月 文部科学省リハビリテーション専門委員(辛島)

(平成 25 年度主任：辛島千恵子)

平成24年度名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）市民公開講座

テーマ：感染症をめぐる最近の話題

—薬剤耐性菌、子宮がんウイルス—

本市民講座は名古屋大学での研究成果や知的財産を地域に還元することを目的とし、一般市民のみなさまを対象に健康や医療に深く関わるテーマを設けて昭和58年以来（当時は医療短期大学部）、毎年開催しています。また、ひとりでも多くの方々に参加していただけるよう平成18年度から受講料を無料としております。平成24年度には名古屋大学医学部保健学科から名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）への組織変更があり、教員の教育や研究は大学院レベルでの活動を中心に行うことになりました。本年度は組織変更後、最初に開講された市民公開講座であり、「感染症をめぐる最近の話題」というテーマのもとに2つの話題で講師をお招きしました。

平成24年度市民公開講座の実施要項は以下のとおりです。

◎開講日時 平成24年10月20日（土）10:00～12:10

◎開講場所 名古屋大学大学院医学系研究科(大幸地区) 東館大講義室（東館4階）

◎受講料 無料

◎定員 100名 事前の申し込みが必要です。

※ 当日直接ご来場された場合でも席に余裕があれば受講いただくことができます。

「感染症をめぐる最近の話題：薬剤耐性菌、子宮がんウイルス」

第1講 10:00～11:00 「薬剤耐性菌の広がりとその予防にむけて」

（講師：川村久美子 先生・名古屋大学大学院医学系研究科病態解析学講座）

【内容】現代では、病原菌による病気を治す抗生物質の開発がめざましい一方、抗生物質が効かない「薬剤耐性菌」の出現が問題となっています。薬剤耐性菌は医療の現場だけではなく、健康な方にも広がっていることがわかってきました。講義では、薬剤耐性菌の現状と取組みについて一緒に考えてみたいと思います。

第2講 11:10～12:10 「予防できるがん—子宮頸がん—」

（講師：今井律子 先生・西知多医療厚生組合東海市民病院臨床検査科）

【内容】多くの子宮頸がんの原因はウイルスの感染であることがわかっており、原因となるウイルスの感染を予防するワクチン接種も始まっています。講義では、子宮頸がんの検査と診断、原因ウイルスの感染予防の重要性についてとりあげていきます。

本年度の講座には60名の出席があり、その内訳は、事前申し込み者（54名）から32名、教職員を含む当日一般出席者が23名、学生が5名でした。出席者の内、46名からアンケート回収にご協力がえられましたので、その結果を以下に示します。

①性別、②年齢構成

	男	女	計	%
10代	3	0	3	7
20代	0	6	6	13
30代	1	0	1	2
40代	2	5	7	15
50代	1	7	8	17
60代	0	5	5	11
70代	2	9	11	24
80代	2	2	4	9
未記入	0	1	1	2
計	11	35	46	100

③職業

	男	女	計	%
学生	4	8	12	26
会社員	3	3	6	13
自営業	0	0	0	0
主婦	0	11	11	24
その他	1	6	7	15
無職	3	5	8	17
未記入	0	2	2	4
計	11	35	46	100

④本学の卒業生か

	男	女	計	%
はい	2	5	7	15
いいえ	9	27	36	78
未記入	0	3	3	7
計	11	35	46	100

⑤本講座を何で知りましたか

	男	女	計	%
新聞、TV	0	0	0	0
区役所	0	1	1	2
生涯学習センター	0	0	0	0
図書館	0	1	1	2
友人情報	0	3	3	7
本学科からの案内	5	23	28	61
ホームページから	4	6	10	22
その他・未記入	2	1	3	7
計	11	35	46	100

⑥感想を聞かせてください

	男	女	計	%
役に立った	8	30	38	83
まあ役に立った	3	4	7	15
あまり参考にならなかった	0	0	0	0
その他	0	0	0	0
未記入	0	1	1	2
計	11	35	46	100

⑦実施方法について

A全体の時間について

	計	%
長い	2	4
丁度よい	43	93
短い	0	0
未記入	1	2
計	46	100

Bテーマ毎の時間について

	計	%
長い	2	4
丁度よい	40	87
短い	0	0
未記入	4	9
計	46	100

C講演形式について

	計	%
講演型式	32	70
参加型セミナー	3	7
その他	0	0
講演型式+参加型セミナー	2	4
未記入	9	20
計	46	100

希望テーマ、感想

- ・ 指のヒビワレ、手荒れなど
- ・ MRIによる脳の研究が予定されているとの事、できれば是非参加したい
- ・ 種々の感染症（SARS・パンデミック等）の問題となる・・・

- ・高脂血症の治療とリスク
- ・認知症
- ・糖尿病治療最前線
- ・元気に高齢期を迎えるには（過ごすには）
- ・（むやみに）薬を飲まずに元気でいられるには
- ・これからの医療について（保険が長期に成り立つには、医療、患者の考え方について）
- ・医者もたくさん薬を処方しない様に願いたい（実際に耐性菌を持っているとしても）
- ・膠原病、難病について
- ・サプリメント等に関する研究発表
- ・統合医療について
- ・i P S細胞について
- ・循環器系
- ・自律神経について
- ・他のがん講座
- ・参加人数が少なくてもったいない

まとめ

本年度の市民公開講座は大学院講座化により検査技術科学専攻から組織変更された医療技術学専攻病態解析学講座が担当しました。学内外から1名ずつの講師に依頼して、感染症をめぐる話題について講演をしていただきました。おふたりとも臨床検査技師有資格者であり、教育機関や臨床現場での豊富な経験をお持ちで、それぞれのご専門分野での最近の内容をわかりやすくお話しいただき、出席者のみなさまからも高い評価をいただきました。特に学外からおよびした今井律子先生は、日常は病院の検査部門での多忙な業務をこなしながら、子宮頸がん予防のための知識や予防接種の普及にむけて教育講演など社会的な啓蒙活動にも積極的に取り組んでおられる方で、講演終了後も出席された市民の方からの熱心な質問に丁寧に対応いただくことができ、とても有意義な公開講座を開催することができました。なお子宮頸がん（HPウイルス感染症）は平成25年4月に従来の任意接種から定期接種の対象疾患に移行する制度変更があり、多くの女兒が予防接種を恩恵を受けることができるようになりましたが、この実現には今井先生のような熱意のある方の社会活動が貢献したところが大きく、この意味でも大変ホットな話題を市民のみなさまに提供することができました。

（地域貢献委員会 平成24年度委員長 近藤高明）